



今、基礎工がアツい!?

基礎工学部、それは本学でもっとも謎に包まれた学部である。本学部について、簡単に説明するとなれば「電子応用工学科、材料工学科、生物工学科の三学科からなり、今年で創設29年目となる本学では比較的新しい学部」ということになる。しかし、この情報からどのような学部なのか掴める人は少ないだろう。そこで、基礎工生として本学部を説明するとすれば、やはり「長万部」という単語に限る。また本学部は、本学で唯一「クォーター（四学期）制度」が試験導入されるなど、今まさに「アツい」学部なのだ。そこで今回は、基礎工の生態と銘打って、普段知ることの出来ない本学部について紹介したい。



▲基礎工学部の象徴とも言える
スペース・ノヴァの木

学式で「基礎工学部、起立」の掛け声と共に本学部一年生が、バスへと乗り込み、北の大地へと旅立つ勇姿を目撃した人も多いだろう。その後、一年生は休む間もなく羽田空港から新千歳空港へ向かい、またバスに揺られ、気が付けば入寮しているのだ。そして、約1年間のドキドキワクワクな寮生活が始まることになる。

寮は一人部屋ではなく、必要最低限の家具が備わったスペースをそれぞれに分け与えられる共同部屋である。（28期生では最大四人部屋、29期生では最大五人部屋である）このプライベート空間がないといつても過言ではない環境で、基礎工生はいかにして寮生活を通じずのか。それを知る

には、クラスター、課外活動、長万部町という三つがキーワードとなる。

まず、クラスター(Cluster)とは、英語でブドウの房や集団という意味であり、これは基礎工生の集団を表す単位の一つである。そもそも寮は1〜3号棟の男子寮、4号棟の女子寮の合計4棟からなっており、さらに各号棟は左右でA棟とB棟に分けられる。そして3号棟のB棟であれば33Bクラスターと命名されるのだ。各クラスターには、PC、TVや長机、簡易キッチンなどが備わったラウンジが与えられ、ここが日常生活の活動拠点となる。男子禁制の女子寮も女子学生の増加に伴って建設され、こちらは新築でIHキッチンや男子寮の2〜3倍はあるのかという広大なラウンジが備え付けられている。

次に長万部での課外活動についてであるが、ここで疑問なのは一年生だけで課外活動はどうするのかという点である。実は長万部キャンパスの団体は、ほとんどが部活動である。前年度の情報をとに部員を募り、一から部活を作って活動するのだ。よって毎年活動の規模や方針は異なり、変化をしながら活動の歴史を作っている。体育会系の部活は、キャンパスの広大な敷地もあつて活動場所にめぐまれている。また、文化の部活においても防音室、ピアノ、キッチンや娯楽室完備の学生会館により、活動の幅は広いといえるだろう。なかには隣接しているゴルフ場を利用したゴルフ部や、パワーリフティング部など特徴的な部活動もある。また、学生会館は正式名称をエソール会館といい、一時間百円のカラオケを利用する学生も多い。

最後に長万部町についてである。在寮期間中に外泊や町の外へ出るには、大学への申請が必要であるため、日常生活の多くを町内で済ませる学生が多い。買い物は商品の値段と店までの距離を天秤にかけて店を選ぶ訳だが、通える距離で最も遠いスーパーまでは片道2kmであり冬季であればもはや一種の修行である。某有名コンビニエンスストアでさえキャンパスから片道1km、もう一方は片道2kmという全くコンビニエンスな距離ではない。そこで基礎工生は噂に伝わる学寮のけもの道を探し出し、少しでも生活を便利にしようと必死になるのである。そして毎年、冬季に雪が1m以上

面に分らないことがあつてもすぐに話し合える」と答えた学生も多く、学習面に与える影響も大きいのだろう。他には「田舎だと思つて不満な部分があつたが、真つ暗な空地から見える星があんなにも綺麗だと初めて知つた」との回答もあつた。やはり長万部の星空を通して、都会では味わえない星の魅力にはまる学生も多いのかもしれない。

逆に寮生活の悪い点では「プライバシーがない」、「クラスターメンバーの相性仲が悪くなった時の対処などが難しい」との回答が多く、人と接する距離が近い共同生活では、一人の時間が確保できず不満を感じる学生や、人間関係で悩む学生が多いようだ。

現在、寮生活を送っている29期生は寮生活を始めるにあたって「友達ができるか、みんなどうまくやっているか不安だった。」と答える学生がやはり多かった。また一ヶ月半の寮生活を過ごして「人との距離がとて近く、良くも悪くも楽しい」と答える学生も多く、今年も学生はプライバシーや人間関係に悩みつつ、寮生活に楽しみを感じているようだ。また「大型書店や家電量販店、服屋が無いので不便だ」と答える学生もおり、現代を生きる若者への長万部の洗礼は、相変わらずのようである。

基礎工生の声から見える寮生活は、学習面では利点が多く人間関係ではやはり乗り越えるべきことが多いといえるだろう。また、かの有名な「オシャマジック」という言葉のもととは「初年度教育により学生が魔法にかかったかのように活躍する」という意味を指すのは、寮生活による学習面での効果なのかもしれない。

降りに積もっていることに気が付かず、けもの道へと足を踏み入れて大変な思いをする者が後を絶たないのだ。

やはり寮生活に対する最大の疑問は、実際のところそれが良いのか悪いのかというものだろう。そこで生の声を聞くべく、寮生活を終えた基礎工生や寮生活を送っている一年生に協力していただき、アンケートを実施した。

寮生活を終えた基礎工生への「長万部キャンパスでの寮生活はどうでしたか」という質問では、とても楽しかったという回答が約80%となる結果になった。この結果から、寮生活に何かしらの楽しみを見出していた学生はやはり多いと分かる。寮生活の良かった点では「友達に困らない。上辺だけではない友達ができ、寮生活は友人作りという面では有利な環境と言つてよさうだ。また「起こしてくれるので寝坊しない」、「学習

やほり寮生活に対する最大の疑問は、実際のところそれが良いのか悪いのかというものだろう。そこで生の声を聞くべく、寮生活を終えた基礎工生や寮生活を送っている一年生に協力していただき、アンケートを実施した。

寮生活を終えた基礎工生への「長万部キャンパスでの寮生活はどうでしたか」という質問では、とても楽しかったという回答が約80%となる結果になった。この結果から、寮生活に何かしらの楽しみを見出していた学生はやはり多いと分かる。寮生活の良かった点では「友達に困らない。上辺だけではない友達ができ、寮生活は友人作りという面では有利な環境と言つてよさうだ。また「起こしてくれるので寝坊しない」、「学習

ここまでは、謎に包まれた基礎工生の生態を一年次の学寮生活に注目して紹介してきたが、この記事を読んだ、基礎工生という学部なのかと、少しでも掴んでもらえたら幸いである。

最後に、本学部の象徴とも言える『あるもの』を紹介したい。それは「スペース・ノヴァの木」である。これは長万部キャンパスの平原に植えられた木であり、その名前は校舎入り口に書かれた「SPES NOVA1987」に由来しているらしい。意味はラテン語で「新しい希望」。これからの社会を担う若者を表したというその言葉が、本学部のシンボルなのである。基礎工生もまたスペース・ノヴァとなるのか、今後の基礎工学部の活躍から目が離せない。

くのではないか。これは、今までの伝統を破る、革新的な戦略だった。神楽坂は、徳島県の阿波踊り協会の協力を仰ぎ、1972年に本場の阿波踊りを披露してもらふことになった。これが神楽坂の阿波踊りの原点である。

2011年、全国各地の夏祭りに危機が起つた。東北で未曾有の地震が発生したのだ。この悲劇に、東京都は夏祭りを自粛するような流れになつていった。

この流れに対し、神楽坂通り商店会の役員会は、紛糾していた。神楽坂まつりを開催するか開催しないかについてである。膠着した議会の中、場を動かしたのが、福井会長だった。

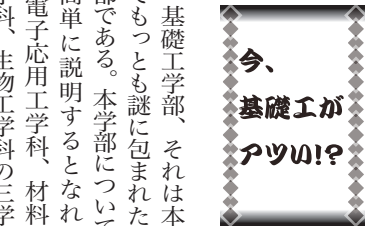
会長は「開催する」という断固たる決意を示したことで「祭りを開催する」流れに変更されたのである。当時のことを、福井会長は「神楽坂がやらなければ、他の夏祭りまでもが自粛の流れとなつてしまふ。夏祭りには鎮魂としての意味がある。3・11で亡くなった方々のためにも、祭りで人々の士気を高めたかった」と語っていた。

神楽坂まつりが行われ

た後から、東京都各地で夏祭りが企画され始め、東京都もその意向を無視できなくなつた。夏祭りを開くという、神楽坂の意地と神楽坂まつりの誇りが各地を動かし、最終的に東京都をも動かしたのである。

一方で被災地への配慮も忘れない。以降の祭りのキャッチコピーを「がんばろう!日本」に固定した。また、ほおずき市では、東北の企業の出店を歓迎し、神楽坂まつりを通じて募金活動を行っている。それらの活動は、今でも続いている。

反対意見が多数を占めているときに、自らの意見を押し通すのは難しい。と信じていても、どうしても足がすくんでしまふ。そのような中、自分の意見を押し通し、先に進むには、曲げられない誇りというものが必要なのだろう。一度確立された誇りは、時を越え、確かに後世へ受け継がれている。今年の祭りは、7月22日、23日にほおずき市が、24日、25日に阿波踊りが開催される。試験中だが、ちよつとした息抜きに立ち寄つてみてはいかがだろうか。



今、基礎工がアツい!?

基礎工学部、それは本学でもっとも謎に包まれた学部である。本学部について、簡単に説明するとなれば「電子応用工学科、材料工学科、生物工学科の三学科からなり、今年で創設29年目となる本学では比較的新しい学部」ということになる。しかし、この情報からどのような学部なのか掴める人は少ないだろう。そこで、基礎工生として本学部を説明するとすれば、やはり「長万部」という単語に限る。また本学部は、本学で唯一「クォーター（四学期）制度」が試験導入されるなど、今まさに「アツい」学部なのだ。そこで今回は、基礎工の生態と銘打って、普段知ることの出来ない本学部について紹介したい。

降りに積もっていることに気が付かず、けもの道へと足を踏み入れて大変な思いをする者が後を絶たないのだ。

やほり寮生活に対する最大の疑問は、実際のところそれが良いのか悪いのかというものだろう。そこで生の声を聞くべく、寮生活を終えた基礎工生や寮生活を送っている一年生に協力していただき、アンケートを実施した。

寮生活を終えた基礎工生への「長万部キャンパスでの寮生活はどうでしたか」という質問では、とても楽しかったという回答が約80%となる結果になった。この結果から、寮生活に何かしらの楽しみを見出していた学生はやはり多いと分かる。寮生活の良かった点では「友達に困らない。上辺だけではない友達ができ、寮生活は友人作りという面では有利な環境と言つてよさうだ。また「起こしてくれるので寝坊しない」、「学習

ここまでは、謎に包まれた基礎工生の生態を一年次の学寮生活に注目して紹介してきたが、この記事を読んだ、基礎工生という学部なのかと、少しでも掴んでもらえたら幸いである。

最後に、本学部の象徴とも言える『あるもの』を紹介したい。それは「スペース・ノヴァの木」である。これは長万部キャンパスの平原に植えられた木であり、その名前は校舎入り口に書かれた「SPES NOVA1987」に由来しているらしい。意味はラテン語で「新しい希望」。これからの社会を担う若者を表したというその言葉が、本学部のシンボルなのである。基礎工生もまたスペース・ノヴァとなるのか、今後の基礎工学部の活躍から目が離せない。

くのではないか。これは、今までの伝統を破る、革新的な戦略だった。神楽坂は、徳島県の阿波踊り協会の協力を仰ぎ、1972年に本場の阿波踊りを披露してもらふことになった。これが神楽坂の阿波踊りの原点である。

2011年、全国各地の夏祭りに危機が起つた。東北で未曾有の地震が発生したのだ。この悲劇に、東京都は夏祭りを自粛するような流れになつていった。

この流れに対し、神楽坂通り商店会の役員会は、紛糾していた。神楽坂まつりを開催するか開催しないかについてである。膠着した議会の中、場を動かしたのが、福井会長だった。

会長は「開催する」という断固たる決意を示したことで「祭りを開催する」流れに変更されたのである。当時のことを、福井会長は「神楽坂がやらなければ、他の夏祭りまでもが自粛の流れとなつてしまふ。夏祭りには鎮魂としての意味がある。3・11で亡くなった方々のためにも、祭りで人々の士気を高めたかった」と語っていた。

神楽坂まつりが行われ

た後から、東京都各地で夏祭りが企画され始め、東京都もその意向を無視できなくなつた。夏祭りを開くという、神楽坂の意地と神楽坂まつりの誇りが各地を動かし、最終的に東京都をも動かしたのである。

一方で被災地への配慮も忘れない。以降の祭りのキャッチコピーを「がんばろう!日本」に固定した。また、ほおずき市では、東北の企業の出店を歓迎し、神楽坂まつりを通じて募金活動を行っている。それらの活動は、今でも続いている。

反対意見が多数を占めているときに、自らの意見を押し通すのは難しい。と信じていても、どうしても足がすくんでしまふ。そのような中、自分の意見を押し通し、先に進むには、曲げられない誇りというものが必要なのだろう。一度確立された誇りは、時を越え、確かに後世へ受け継がれている。今年の祭りは、7月22日、23日にほおずき市が、24日、25日に阿波踊りが開催される。試験中だが、ちよつとした息抜きに立ち寄つてみてはいかがだろうか。

▲数々の思い出が生まれた男子寮ラウンジ

降りに積もっていることに気が付かず、けもの道へと足を踏み入れて大変な思いをする者が後を絶たないのだ。



くのではないか。これは、今までの伝統を破る、革新的な戦略だった。神楽坂は、徳島県の阿波踊り協会の協力を仰ぎ、1972年に本場の阿波踊りを披露してもらふことになった。これが神楽坂の阿波踊りの原点である。

2011年、全国各地の夏祭りに危機が起つた。東北で未曾有の地震が発生したのだ。この悲劇に、東京都は夏祭りを自粛するような流れになつていった。

この流れに対し、神楽坂通り商店会の役員会は、紛糾していた。神楽坂まつりを開催するか開催しないかについてである。膠着した議会の中、場を動かしたのが、福井会長だった。

会長は「開催する」という断固たる決意を示したことで「祭りを開催する」流れに変更されたのである。当時のことを、福井会長は「神楽坂がやらなければ、他の夏祭りまでもが自粛の流れとなつてしまふ。夏祭りには鎮魂としての意味がある。3・11で亡くなった方々のためにも、祭りで人々の士気を高めたかった」と語っていた。

神楽坂まつりが行われ

た後から、東京都各地で夏祭りが企画され始め、東京都もその意向を無視できなくなつた。夏祭りを開くという、神楽坂の意地と神楽坂まつりの誇りが各地を動かし、最終的に東京都をも動かしたのである。

一方で被災地への配慮も忘れない。以降の祭りのキャッチコピーを「がんばろう!日本」に固定した。また、ほおずき市では、東北の企業の出店を歓迎し、神楽坂まつりを通じて募金活動を行っている。それらの活動は、今でも続いている。

反対意見が多数を占めているときに、自らの意見を押し通すのは難しい。と信じていても、どうしても足がすくんでしまふ。そのような中、自分の意見を押し通し、先に進むには、曲げられない誇りというものが必要なのだろう。一度確立された誇りは、時を越え、確かに後世へ受け継がれている。今年の祭りは、7月22日、23日にほおずき市が、24日、25日に阿波踊りが開催される。試験中だが、ちよつとした息抜きに立ち寄つてみてはいかがだろうか。



▲昨年の「阿波踊り」の様子